

図工・美術指導の可能性を広げる情報誌

造形ジャーナル

ZOKEI JOURNAL

2013
Vol.58-3
No.419



「東京スカイツリー」照明デザイン 戸恒 浩人

特集 人をつなぐ、文化をつくる

開隆堂

光の感性を育もう



とつね ひろひと
戸恒 浩人 (照明デザイナー)

建造物や建物のライトアップ、光環境の設計、都市照明などを手掛ける若手照明デザイナーの一人。代表作品は東京スカイツリー、浜離宮恩賜庭園ライトアップ、ホテル日航東京チャペル等。海外でも活躍の場を広げている。

人は美しいライトアップを見ると感動しますし、素敵な光環境のもとでは癒されますよね。照明デザインとは、光を上手に操って建物や空間を豊かに仕立て、そして人を幸せにするのがゴール、という素敵な仕事なのです。

「照明デザインは何を見て学べばいいの?」「イメージは何となくあるのだけど、どうやって人に伝えたらいいの?」、これらは、照明デザイナーを目指す人に限らず、建築設計者やクライアントから度々受ける質問です。おそらくデザインマニュアルや、具体的な話し方のコツを教えて欲しいという意味なのだろうと思います。が、実は「急がば回れ」。私は、光に対する感性と言葉を育てることが早道だと答えます。その実践は非常に簡単。まずは、人工的な光であふれる空間から抜け出し、自然豊かな屋外に出てみましょう。

光の一番の先生は太陽です。無数の葉を通り抜けて足元に落ちた木漏れ日。強い日差しがつくりだす光と影のコントラスト。水面に反射するきらめきや、澄んだ海の底に映し出される波模様など、太陽の光が偶然に生み出す美しい光景は数えきれないほどたくさんあります。

ちなみに、私の最近のお気に入りとはというと、新雪が降り積もった後の満月の夜ですね。月の光が雪に反射して、あたり一面が青白く輝く景色。これは本当に幻想的!

感動する光に出合ったら、余韻が残っているうちに、自

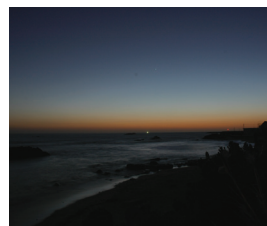
分がどうしてその光に感動したのかを分析してみましょう。たとえば「昼間と違って、夕焼け時の雲がより印象的に感じたのは、太陽の高さが低くなって、雲が下から照らされていたからだな」のように。

素敵な光の現象とともに記憶した言葉を使えば、いつでも誰にでも、表現豊かに光を語ることができるようになります。

仕事を通じて、街や空間を少しずつ素敵にしたい、また、一人でも多くの人に素敵な光の効果に興味をもってもらいたい。私はいつもそう願いながらデザインしています。また、特に未来を担う、感受性豊かな子どもたちには、早い段階から光の効果に気づいてほしい。そして彼らの手によって、今よりもっと素敵な光であふれる世界をつくりだしてほしいと願っています。



緑と光のゲート



暮れる寸前の空

CONTENTS

2013 Vol.58-3 No.419

特集 ほんとうにすごい造形教育

第3回 人をつなぐ、文化をつくる

- ▶文化という語から図工・美術教育を考える
千葉大学准教授 神野 真吾 2
- ▶美術大学が生み出す、アートと人の多様なつながり
武蔵野美術大学准教授 杉浦 幸子 4
- ▶「みる」を意識し、認識力を伸ばす
埼玉県立大宮中央高等学校 松本 清隆 6
- ▶見つける・つながる、図工の時間の子どもたち
東京都小金井市立前原小学校 河野 路 8

私の失敗談

- 子ども子どもと言いながら自分大事の大失敗
元・淑徳短期大学教授 水野谷 憲郎 10

これだけは知っておきたい 描画材編2 11

- 教材研究 小学校** 落ち葉アート、アトリエ中沢の実践
神奈川県横浜市立中沢小学校校長 丸 雄治 12

- 教材研究 中学校** 「15歳の私～夢と幻想～」
メゾチント(版画)で表す
滋賀県高島市立湖西中学校 村田 秀俊 14

- 図工室・美術室**
担任っていいなあ
北海道札幌市発寒東小学校 石垣 あけみ 16
- らせん工芸
福井県坂井市立春江中学校 白崎 徹 16

- 今月の見つけたよ!**
「どこかにキリンが隠れている」 17

- 地域のアート**
「束荷の草木を素敵に見せる花器づくり」 17

ほんとうにすごい造形教育



第3回

人をつなぐ、 文化をつくる

こしら
拵えられたものにはその後ろに人がいる。作者はその地域の歴史を背負い、
価値観を形成し、何が美しく、何を大切にしていけるかを無意識に体得している。
文化は何か特別な人の特別なものやことではない。人に溶け込んでいる感性的判断、
価値意識、人となりに現れる立ち居振る舞い、つまり、まずもって人の中にある。

美術の表現や鑑賞はもっとも端的に「その人と文化」が現れる場面である。

作品鑑賞や制作の意見交換は結局のところ人に思いをはせること、

人を理解することである。もの、人、文化の連鎖を感性で体験するのだ。

異文化交流からの融合文化も自らの文化のよさに気づく場合もダイナミックに
文化をつないでいくことである。造形教育は期待されている。

学習指導要領の中で「美術文化」という言葉が用いられるようになりました。文化はとても曖昧な言葉です。そもそも文化とはどういう意味をもっているのか、その点を確認する必要がありますように思います。

文化の二面性

文化 culture という語は、元々は「耕す」とか「世話をする」という意味のラテン語から発し、知的な「開発」という意味へと変化していった語です。今では大別すると二つの意味があるとされ、一つは、野蛮な人間がさまざまな教養を身につけ、洗練されていくという意味での文化、もう一つは、R・ウィリアムズら、カルチュラル・スタディーズと呼ばれるイギリスで生まれた文化研究のとする立場で「文化」とは一つの社会集団あるいは社会全体の、生活様式の全体」というものです。前者では、身につけるべき正しい教養があり、それらを総称して文化と呼んでいます。一方後者は、どこにでも誰にでも固有の文化がある、という考えに立ち、文化を価値づける絶対的な評価軸

文化という語から 図工・美術教育を 考える

千葉大学准教授 神野 真吾

はなく、その文化を構成するさまざまな意味づけられた諸要素のつながりが文化全体を構成していると考えています。

さて、「美術文化」といった時に、その文化の意味はどちらに近いものなのでしょう。

「我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育や、異なる文化や歴史に敬意を払い、人々と共存してよりよい社会を形成

していこうとするための教育」(学習指導要領美術編解説P.9)

これも曖昧ですが、言い換えれば、文化とは特定の国に結びついた何ものかであり、伝統(古いもの)と関係し、それを理解することが、共生や国際化にとって重要だと言っています。伝統や文化、そのよさの継承・発展、という言葉からは、長く受け継がれてきた疑い得ないもの、つまり高尚な存在としての文化像が窺えます。一方で、自国の古いもの(伝統)や他国で大事にされてきたものの価値を知り、それを理解することが共生や国際化につながるという主張は、「ある集団の生活様式全体」に結びつく文化理解を根拠としているようにみえます。この違いを整理しておかないとさまざまな混乱が生じます。

洗練された教養人として西洋美術についての知識・技能を身につけるべきだ、と声高に唱える人はさすがにいないでしょうが、高尚な「美術」を生徒たちに教えなければ、と使命感に燃えている教員はいまだ多く見られます。それは前者の文化観を根拠とし、それを相対化する後

者の視点はもっていないということになります。

例えば「美術文化」というのは、そもそも西欧において成立し、啓蒙思想や植民地主義を通じて世界に拡散した文化の一つです。18世紀末の個人の成立とともに、個のアイデンティティの確立が西欧世界では至上の価値を有するとされ、芸術はそれを体現する存在として高い位置づけを与えられます。個性を表す教科として、日本で図工・美術が義務教育に位置づけられているのもそれを背景としています。そこで我々が放棄したのも決して少なくありません。それはグローバルな文化が地域の文化を破壊していく現代の課題と全く同じ構造をしています。伝統と美術を考える上で、この視点は極めて重要です。

形と色だけで 文化は語れる？

日本人は文化をとて固定されたものとして捉えがちですが、文化を理解する上で、もう一つの重要な観点は、文化は変化し続け、同じ対象が別々の文化から意味づけられることも

あるということです。

日本の造形教育を例に取れば、美術を「造形要素」へと還元した立場から美術文化を学ぶことには、とても無理があります。神に代わり人間が世界の中心に位置するようになった西欧世界で高い価値づけを得た芸術は、次第に人間性という関心から離れ、19世紀末から20世紀初めにかけてさまざまな芸術運動を展開し、もっぱら造形性という観点で美術を深化させようとしていきます。ここで美術は「真理の探究」という科学的方法を真似て、ひたすらその本質を追究する「芸術のための芸術」と適進します。そのため生活実践から遠ざかり、多くの人々に無関係のものとなっていきます。「形と色」の教科としての図工・美術が成立しているのは、まさにこの部分に関係しています。が、美術の歴史では19世紀末の印象派から抽象表現主義、ミニマリズムといった20世紀中頃までのせいぜい数十年のことです。形と色の教科という位置づけは、美術文化のごく一部しか反映していません。つまり、現状の教科認識で美術文化について

て教えることは偏った理解に導いてしまう危険性をはらんでいるということです。

また、有史以来人類は美術を生んできた、といった言説は、その人が信じる「美術文化」の視点から過去を意味づけているに過ぎません。同じ対象であっても、「私の文化」による意味づけと、「他者の文化」による意味づけが違えば、そこには別々の意味が生じます。自分の世界観で全てを価値づけ、それを押しつけてしまえば、それは他者理解や異文化理解・共生にはつながりません。

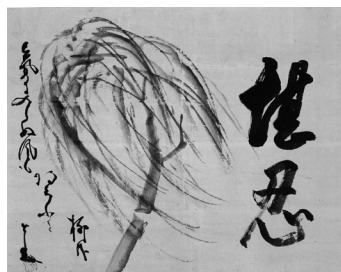
私たちの文化を形づくる

新潟県の妻有^{つまり}地域における「大地の芸術祭」などの成功は、私たちにとつての美術文化が更新されつつある実例としてみることが出来ます。美術家が現地で、さまざまな要素（土地の歴史、風土、景観、人々など）と向き合い、地域の人の理解や協力を得て、都市から手伝いにやってきた若者たちと作品を制作するプロジェクト型の作品が展開されています。ここでは、作品から感じたことを語り合う

などして、美術が（アートという語がこの領域では好まれますが）人と人との相互理解を促進する媒体として評価されています。また、一般市民が作品制作のプロセスに関わり、美術家をはじめとするさまざまな人たちの多様な視点に触れることで自らが変化し、地域は変わっていくという理解もされ始めています。そうした美術のあり方を価値づける「美術文化」が今まさに生じつつあり、そこに私たちは立ち会っているわけです。

さらに言えば、かつて私たちは自身の美術文化をもっていたということを思い出すべきでしょう。江戸時代の禅僧仙厓^{せんがい}の禅画は、彼を慕う市井の人々の悩みや愚痴への彼の応答、コミュニケーションです。作者である仙厓の精神的世界、倫理観、ユーモアなどを内包する彼の「絵」は人々の意識に働きかけ、それを変える力、癒やす力を持つていたのでしょう。西欧的「美術文化」の観点では、専門画家によらず、文字も併用しているこうした絵は美術とは見なされませんでしたし、形と色の観点のみでは、この作品には

ほとんど意味がありません。しかしそこには、日本人が必要とした美術があったのです。



仙厓「堪忍柳風賛」江戸時代：強風にたなびく柳の右に「堪忍」という書があり、左には「氣に入らぬ風もあろうに柳哉」という画賛。

文化は既にある固定的なものではなく、我々が関わることで生起する、あるいは我々が形成していくものだと言えます。日本において、大事だと言われながらも根づいていないとされる美術ですが、我々自身の文化としていまだ形づくられていないということなのでしょう。美術文化は、過去の良き趣味という範囲に留まるものでも、西洋の「美術文化」を真似るものでもない、もっともつとダイナミックな営みです。そこに関わる教科としての図工・美術には、とても大きな可能性があるとともに、大きな責任もあるはずで

人と人をつなぐアートと の出会い

20年前から、美術館やギャラリー、美術大学など、アートに関わるさまざまな場で、アート作品やアーティスト、作品に出合う人々をつなぐ活動や、「つなぐ人」を育成してきましたが、こうした「つなぐ」仕事をするきっかけは、1994年イギリス・ウェールズの大学院留学中に出会った一つの光景でした。

子どもたちが一人の大人と、美術館に展示されていたモネの〈ルーアン大聖堂〉の前に座り、絵を見て質問に答え、楽しそうに会話をしていたのです。

日本の大学で美術史を学んでいた頃、美術館でこうした活動を見たことがなく、美術館が作品に出合う場だけでなく、人々をつなぐ媒体にもなることに気づき、とても驚き、感動しました。この感動が私の「つなぐ」活動の原点になっています。

下の写真は、イギリスを代表する美術館、テート・ブリテンの展示室で目にした光景です。床の上にべったりと座り、作品

美術大学が生み出す、 アートと人の 多様なつながり

武蔵野美術大学准教授 ^{すぎうら さちこ} 杉浦 幸子



テート・ブリテン展示室風景

を見ながら先生や友だちと話をしたり、ワークシートを書いたり、模写をする小学生と、その横には大学生のグループが作品について熱心にディスカッションをしています。一つの作品を媒介に、年齢の異なる人たちが、作品、一緒にいる人、空間とコミュニケーションし、五感を通して刺激を受け、学びを行っています。

このように、アート作品とあったモノや、アーティストや同行者といった人、美術館といった場を十全に活用した美術館における学習支援活動（Gallery Education（美術館教育）と呼びます。

大学美術館がつなぐ

—美術館サポータープログラム—

モノ、人、場が有機的につながる学びの場である美術館と、アートと人がつながるもう一つのユニークな場である美術大学が結びついた学びの事例として、武蔵野美術大学（ムサビ）美術館が、2012年度から始めた「美術館サポータープログラム」を紹介します。このプ

ログラムは、1967年に開館した美術館が2011年にリニューアルオープンしたことをきっかけに始まりました。美術を学ぶ学生が、作品と間近に出合える美術館を活用する機会を増やそうとしたのです。

全11学科から集まったサポーターは現在42人。「教育普及サポーター」と「広報サポーター」という、二つのグループに分かれて活動しています。展覧会の告知やレビュをツイッターで在校生や外部に向けて発信する「広報サポーター」。

「教育普及サポーター」は、展覧会場で作品を目の前に会話をするギャラリートークや、展覧会に合わせて学内の工房で制作を行う体験イベントなどの企画運営を行っています。主な対象者は近隣のエリアから集まってくる中学生。昨年行われた「ムサビ生と楽しむ美術館ツアー」では、サポーターが展示室の作品の前に中学生を誘い、作品について会話をしながら、作品と中学生をつなぎ、その後、制作現場や学生食堂なども見学しました。



ムサビ生と楽しむ美術館ツアー

外にも中にも好評なこのプログラムは、美術大学で学ぶ学生が、自分の学びの場にあるリソースを活用し、人とアートをつなぐことで、他者の学びだけでなく、自分自身の学びをサポートする活動として、これからの展開が期待されています。

美大生と作品が学校に — 旅するムサビ —

もう一つ、大学から外に飛び出し、人とアートをつなぐ活動をご紹介します。その名も「旅するムサビ」（旅ムサ）。

国内外の学校を、自分の作品と一緒にムサビ生が訪れ、生徒

たちと作品を介してコミュニケーションを行うプログラムです。

旅ムサは、2009年に、小平市の中学校の先生から、ムサビで教職課程を担当している三澤一実先生に、生徒たちに「本物のアート作品」を見せたいという話があったことがきっかけに始まりました。評価が確定した作品だけでなく、学生作品も本物の作品と考え、ムサビ生が作品を持って学校を訪れ、自分の作品について中学生と語り合います。

現在、100名近くのムサビ生が登録し、年に20回位、全国



旅するムサビ in 上海

の小・中・高校を作品と一緒に訪れています。つくり手である学生と子どもたちが一緒に作品を見ることで、彼ら、そして先生方や教員、保護者も刺激を受けます。

この写真は、昨年初めて海外で旅ムサをした時の様子です。上海の美術専門の中等教育学校を訪れた学生たちは、中国の子どもたちと作品を介して非言語コミュニケーションを体験し、互いの価値観の違いを発見し、楽しむ時間を過ごしました。

美術大学がもつ、豊かな 文化リソースを活用する

こうした取り組みと共に、私自身も同じ学科の教員と連携し、「映像から学びを考える」合同ゼミをつくり、所属する学生が主体となって小学校や養護学校と企画を行い、ピクシレーション（人間の動きをコマ撮りするアニメーション）と鑑賞を切り口とした映像ワークショップを行っています。

美術大学には、アート作品と、アートを学ぶ学生とサポートする教員、作品制作や鑑賞の場が



小学校でのピクシレーション（ワークショップ風景）

備わっています。こうした豊かなリソースを、大学の中だけで利用するのではなく、次世代を担う子どもたちの学びに活用するプログラムを行うことが、美術大学がこれから果たすべき社会的役割の一つであると考えます。アートと人をつなぐ美大と一緒に、学びの可能性を広げていきたい先生や学校との協働を、これから増やしていきたいと思っています。関心のある先生方からのコンタクトをお待ちしています！

はじめに

三つの教材を紹介します。それらは、みること、感じることに自覚的になり「人をつなぐ、文化をつなぐ」、そのいとぐちにも連なると考えます。

日常に潜む差異を意識させる右利きと左利き。絵を描く利き手のことではありません。皆さんは自分の、右目と左目どちらが利き「目」ですか？もし、ご存じなければ次のことをやってみてください。3mくらい先の目標物を決め、みつめます。両腕を伸ばし、両方の親指と人差し指で三角形をつくり、指の枠の向こうにみえる目標を眺めまわす。次に片目ずつまぶたをつぶると、ずれてみえる側と、ずれないで指の三角の中に目標がみえる側が分かります。ずれない方が、情報を主に取り入れている「目」ですね。例えば、そんなヒントを指導に潜ませて、みえるのは「当たり前」という生徒に「ものがみえるとは」という意識づけを提供できるよう配慮しています。

関連する課題に、「線遠近法

「みる」を意識し、認識力を伸ばす

まつもと きよたか
埼玉県立大宮中央高等学校 松本 清隆

を用いた制作」があります。これはルネサンス期の技法を応用した制作です。花屋さんで手に入る透明度の高いセロハンを10号の木枠に貼り、グリットをマジックで裏面に描き、片目（利き目）で形の境界をマーキングします。できた線描に上質紙を押しつけ、鉛筆でなぞり、転写



上：風景の画面投影をマーキングしている様子
下：線遠近法作品

します。粉末顔料を少量水で溶き、彩色するというものです。多くの場合、広角レンズで撮影したようなパースペクティブが出現し、手前の机が（観念的な認識より）大きな面積を占めます。自分がみている（と思っていた）世界の「量とバランス」が、いかに頭の中で調整、つくったものだったかという新鮮な認識、「つなぐために」は「つながっていない部分」、自己の定位化が表現にも必要とも思います。

本物の素材を使わせる

美術Iでは絵画を2枚描かせます。1枚は静物画、もう一つは古典作品模写です。

私はチューブの油絵の具は用いずに学校で自家製のテンペラ絵の具と油彩絵の具をつくり、彩色させています。クサカベの粉末顔料にテンペラメディウム（ダンマル樹脂をテレピンで溶解したもの）に鶏卵を混ぜた、エッグテンペラ技法）にチタニウムホワイトを混ぜてテンペラ絵の具をつくりまわす。油彩画の初体験者には、これが当たり前と思わせているので、苦情は出ませんが、ちよつと変わっているかもしれませんね。でもテンペラはメリットの方がはるかに多いのです。それはまず体質顔料が混入していないこと。チント（染料系）を用いない鉱物顔



模写 テンペラ技法作品

料の美しい発色を体験できること。さらに油絵の具セットに比べて、比較にならないくらい安価に、純粋な色彩の絵の具がつかれます。おおむね一人300円ぐらいでチントではない、カドニウムレッドやコバルトブルー、セルリアンブルーなどを含む10色程度の顔料を準備し、絵が描けると思います。乾燥が極めて速く、15分程度で色が重ねられることなどが授業に向いています。共同購入で瓶から小分けして使用します。デメリットは転色しやすいこと、つまり、体質顔料を含まない絵の具は隠蔽力が強いいため混色で転調が早

く、調整が難しいことです。対応方法は他の色彩と親和性のあるローシェンナとローズマダーを調色する色彩に入れることで、色彩調整しやすくしています。またテンペラで推奨されるハッチング技法は難しいので、硬い油彩筆に絵の具を少量つけて刷毛目目でブラッシュストロークを施します。

彩色はテンペラ絵の具をつくる時に用いたダンマル溶液と顔料のみを溶いて油彩画の絵の具にし、塗り重ねてもよいでしょう。この場合、混合技法というスタイルになります。形態と彩色（明度と彩度）を分けているので、「色でデッサンする」などの非常に高度な技術、修練を必要とせず、途中で終了して未完成でも、それなりに美しい作品が手元に残ります。

情報発信カメラ

生徒はカメラの中に映すフィルムを描きます。カメラ外箱は自作しました。アニメーションのセル画B4サイズにアクリル絵の具で自分の学校に対しての思い、イメージを描き、みんな

の作品をつなぎ、巻き取りと送り出しできるフィルムにします。フィルムを入れたカメラの先には背景となる模型を置きます。フィルムを覗くとまるで模型に投影されているかのようにみえます。背景になる学校の模型は百五十分の一サイズ（1×2m）のものを以前美術の授業でつくりました。生徒は神の視点で世界を眺め、学校に意味づけを施していきます。

このカメラで大事なことは、実際に覗けるのが一人だけということです。「なんだろう、おもしろそうだな」という感覚が鑑賞者に生まれたときから作品鑑賞が始まっています。その臨場感の体験は「人と人をつなげ」、作品成立の大きな要因になっています。カメラの着想は、イリュージョンの対概念として「無垢の体験」という軸を考えてつくりました。一般にカメラで撮られた写真が（個人の）世界観の本人以外のひととの共有物なら、このカメラの投影は個人の視点を共時感覚で眺める、つまり、制作者の心の網膜に投影した内容に近い構造になっています。

と 생각합니다。そういう意味で対象的でなく、リアル性があると思います。簡単にいえば、覗くと楽しいということです。



カメラを覗くと
投影されたようにみえる



情報発信カメラの鑑賞風景：中央のハンドルを回してフィルムを送る



つながる

私は神輿みこしが大好きで、毎年のように祭で神輿を担いでいる。10年前に担ぎ始めた頃は、祭の、ただその時間だけに陶酔したり高揚したりできるところに魅了されていた。回を重ねるにつれ、考え方も生き方も世代も違うもの同士が、同じ時間・場・思いを共有し、祭という一つのものに向かっている、その一体感に強く惹かれるようになってきた。そこでは地域の年長者と若者との間で自然に文化の伝達が成されている。言葉だけでなく、体や感覚を通じて、人と人とのつながりの中で、祭は時代とともに少しずつ形を変えながらも受け継がれている。

これに似たようなことを図工の時間にも感じたことがある。図工という時間の中でつながり合う子どもたちの姿について考えてみた。

交流授業の中で

私が毎年取り組んでいる交流授業では、子どもたちは、現代を生き、言葉を交わせるア

見つける・つながる、 図工の時間の 子どもたち

こうの みち
河野 路
東京都小金井市立前原小学校

ティストや専門家と出会い、造形活動という共通の体験を共有していく。アーティストや専門家は子どもたちにとってそれぞれの道の専門家であり、自分の信念や技術をもった人生の先輩である。出会いの瞬間は全く未知の存在である。

でも、活動がスタートすると「おもしろい」「楽しい」と思える体験を共有できる仲間、ある



交流授業でアーティストと出会う

いは困難に共に向かい、同じ目的に向かつて一緒に活動してくれる仲間となり、その距離が一気に近くなる。ものを生み出すという一つの目的や思いのもとに子どもと大人という枠組みを越え、交流することができた。

交流授業の中では、子どもたちの柔軟な発想やパワーと、アーティストや専門家の世界観や人となり、専門性が出合うことによって、そこに新しい活動や関係が生まれてくるのを幾度となく実感することができた。

鑑賞で伝え合うことから

子どもたちを連れて美術館に出掛けたい日。まず一つの作品を前にして対話する時間がもたれた。作品の色に注目する子、

描かれているものの形から連想する子、物語性を感じ取る子、構図の面白さに気づく子、作者の思いに迫ろうとする子と、一人一人が興味をもつ要素が違う。でも不思議なことに意見の対立はほとんどない。友だちの見方から、「そういうふうにも見える」と、作品をもう一度見てみようとする子がたくさんいた。



美術館で作品を前に対話する

作品から感じるという時間を共有し合い、感じたことを伝え合うことによって、自分の見方が変化が生じたり、新しい要素が加わったりして、作品の見方は何倍にもふくらむ。それぞれの見方を認め合い、自分と友だち、自分と作者との相違を自然と確認している姿がここにあると感じた。

「自分」を見つける

交流授業や美術館での鑑賞は学校の外の世界と子どもたちが出会うというかなり非日常的な時間だ。でも、日々の図工の時間でも自分を発見したり、人とつながり合ったりする場面が、ささやかだったり、ダイナミックだったり、さまざまに展開されている。

ある日の図工室で、一人の子が熱心に絵の具を混ぜて青緑色をつくり始めた。パレットいっぱいはいくつも色をつくるが、なかなか納得しない。「うーん」と考え込んで、筆を洗い、また色をつくろうとして、ふと気づいた。筆洗の水の中をじつとのぞき込んで満足そうに笑い、私を呼んだ。

「先生、見て！ きれいな色できたよ！ 早く、早く！」

「きれいだね。たくさん色をつくったけど、これが一番なんだね。」

「そう。透き通って、沖繩の海みたいなの。」

この子は自分の心に響くみずみずしく透明感のある青緑色を、パレットの中ではつくれず、

試行錯誤するうちに、筆洗の中に「沖繩の海みたいな色」を見つけだした。自分の心の色を目に見えるように表すことができたのだ。その発見の喜び、造形体験は子どもの中に実感とともに蓄積され、また別の活動に結びついていく。

人やものと触れ合い、活動していく中で、活動のプロセスや作品のあらゆるところに子ども一人一人の内面や、外から受け取っているもの、変化などの片鱗が立ち現れてくる。そこに「自分」が現れてくる。「文化」が人それぞれの感性・価値意識であるとするば、ここでは子ども一人一人の文化が生まれている。日常の図工そのものが、子どもたちが文化を紡ぎだしている営みの場なのだと思う。

「他」とつながる

「沖繩の海みたいな色」を見つけだした子の隣に座っていた友だちが、

「それじゃ、わたしのは朝の海の色だよ、金色なの。」

と加わってきた。その子も友だちの発見から自分の筆洗の水の色

の美しさに気づいたようだった。

自分が表したいものと他者が表したものが、形や色、活動になって現れてくると、そこから共通点や差異を見出し、自然と表し方や考え方の伝え合いが始まる。言葉に変換できないニュアンスも、ものや表現を介し、感覚的に伝えたり、受け取ったりできるのは図工・美術の世界ならではの発信・伝達だ。

「自分」を表すことそれ自体はとても個人的なことのように思えるが、実は「他」があつてこそその「自分」であることに気づくことでもある。「自分」を表すうちに「他」を意識したり、「他」と伝え合う・つながり合うということが生まれてきたりするのは自然なことなのだなど、子どもたちの姿を見ても感じる。

学校という、いろいろな子どもたちが集まる場で、同じ造形体験を共有する図工の時間は、子どもが自ら「自分」という文化を紡ぎだすためにも、「他」との関係築いていくためにも本当に大事な時間の一つだと感じる。「自分」という核が豊か

になっていくと、そこからより豊かに「他」とのつながりが生まれていくのではないだろうか。美術を媒介として人と人、文化と文化をつなぐとする動きは、地域振興や海外交流などの方面で最近特に盛んに見られる。それは造形活動の共有が、人と人の間の年齢や距離や言葉の違いなどを越えたつながりの鍵として認識されているということの表れではないかと思う。



自分の表したい色・形を見つけた



友だちの発見した色も「いいな！」

私の失敗談



子ども子どもと言いながら自分大事の大失敗

美は混沌とした カオスから生まれる

私の美術教育は保谷（現東京都西東京市）の新設中学校から始まりました。プレハブ校舎の中学校は雨が降れば生徒の声が聞こえなくなる大変さ。しかし、ゼ口からつくり上げていく醍醐味は得難いものでした。やがて夏休み明け、新校舎ができて上がり、朝礼で校長先生が表記の言葉を発したのです。「今、美術室からカオスが湧き出ています。皆さん掃除をしましょう」私はひたすら赤面するばかり。真新しい校舎。その廊下に白い足跡が連綿と重なり、辿って行けば美術室。しまったと思いました。時遅し。頭像制作の仕上げに石膏取りをしたのです。

足ふきを、いやシートをと思うのは後の祭り。中学校美術教育最初の難題はいかに片づけや保管をするかです。できれば一つの題材が終わるまで、そのまま作品を並べて置ける広い体育館のような美術室がないものかと夢想したものです。こうして新米教師の日々は何をしても手に収まらない失敗続きとなりました。

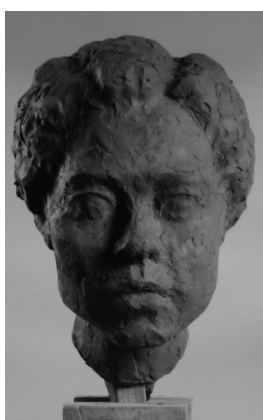
教師の優位性

先の失敗は私をあらぬ方向へと向かわせました。いかに授業を思い通りに進めるかということです。頭像を生徒に任せ

ればうちわ型やこけし型の平板な顔になりがちです。そこでモデルを真横に向けて、そのまま粘土で形取り、正面に向けて、今度は耳の位置のアウトラインに合わせて一回り幅をつけ、絶対に細部は造ってはいけないことにする。一通り側面と正面のシルエットができたなら斜めから一回りアウトラインに沿って粘土をつける。次に目鼻口の立体形の図解や肉付けの順序、例えば目であれば眉から頬にかけて下向きの斜面をつくらから目玉をつくるなどの手順を一斉に細かく規制したのです。生徒はそれぞれの形にいきつく方法を知りません。従って教師は常に優位であり、生徒から全面的に頼られる道案内人となりました。

僕たちは高度なことを しているのですね

いよいよ完成に近づいた頭像。どの生徒も左のようにできました。これらの学習が生徒にとっていかなる意味をもつかを



問うこともなく授業の支配を狙いました。その結果、生徒の一人が先のようなことを言ったのです。昭和53年の2月でした。さらに外にあった井戸の水で手を洗いながら「先生、水暖かい」という言葉に震えました。思春期の中学生が私を信じ「高度なことを教えてくれているのだ」と思い、劣悪な環境さえ水の暖かさに気づく喜びに変えている。大成功と思っていました。根本的な問題にまだ気づいていなかったのです。

難しいのが美術？

この達成感私の授業づくりを方向づけました。そのような時、生徒たちが何気なく語っている言葉にどきりとしみました。「中学校に来るとみんな絵がぎこちなくなる」「だってなんか難しいことやっている感じ、勉強みたい」というのです。勉強でいいではないかと思うのですが、子どもが勉強という時は嫌だけどやらねばならないものといった意味がつきまとう。

私は「そんなはずはない、クロッキー枚数競争も楽しそうにやっているではないか」と思ったのです。私は自分の指導を棚に上げて、表現はやりたいたい自分のやり方で実現していく楽しいものだと思っていました。自分の問題を見つめていなかったのです。

これだけは 知っておきたい

描画材編2

描画材料の
さまざまな使い方を
知っていることが、
子どもたちの学習の
サポートにつながる。

クレヨンを使用する際の決まりごとはありません。むしろ、「折ると、こんな使い方もできるよ」「クレヨンを横にすると、太い線が描けるよ」などと提示すると、活動が広がります。

次のような特性や方法があることを知っておくとよいでしょう。

○クレヨンの特性

- ・棒状で使いやすい。
- ・太くも細くもかける。
- ・面ぬりもしやすい。
- ・鮮やかな色が出る。
- ・色を重ねることができる。
- ・濃淡を出すことができる。
- ・水(水彩絵の具)をはじく。
- ・引っかけて削ることができる。

○クレヨンを使った方法

- ・こすり出し(フロッターージュ)
- ・写し絵(複写)
- ・はじき絵(パチック)
- ・引っかかり絵(スクラッチ)
- ・型紙を使って(ステンシル)

元・淑徳短期大学教授

みずのや のりお
水野谷 憲郎

自己矛盾と大転換

小学生の絵を見ました。巨大な近景の間からはるかに小さく遠景を描いています。これは流行りました。

しかし、この遠近効果を考えている人はだれでしょう。子どもではありません。この絵は、先に画面全体に大きく花などを描かせ、次に小さな画用紙に風景を写し、それを合体しています。この構図は子どもの意図ではなく教師のもので、従って教師の表現です。

ようやく私はおのれの問題を誤魔化しきれなくなりました。私の頭像指導がまさに同じです。私の考えを生徒の手で実現するプログラムをつくり、答えを全て教師が握る授業をしていたのです。結果、私の作品とそっくりな表現が並ぶのです。

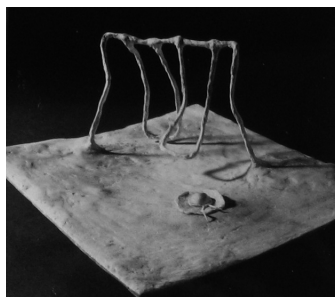
私は大反省し、自己否定しなくてはならなくなりました。表現主題そのものを

生徒自身に託していくという当たり前すぎることをやと自分に問うことになったのです。

生徒に託す

平成2年「風景彫刻」、平成4年「BOX ART」、平成9年「ギタイ工房」、平成12年「化石工房」、平成12年「マイアートギャラリー」と毎年開発してきた題材に通底するならいは、いかに生徒が自身の思いやねらい・意図をモチベーションとして展開しうるかというものです。この転換はさまざまな批判をいただきました。しかし、生徒が動き出し、生み出していくその造形の面白さは、それまでのものとは異次元であり心奪われました。

私はようやく美術教育の入り口に立ったのかも知れません(遅れすぎ?)。そして一言、以前進めた頭像という題材に類する問題も見えてきました。教師の答え



「子どもの時よく遊んだ公園、思い出」
題材：風景彫刻
心に残る場面や出来事を風景として表してみよう。

を追体験していく学習だということです。○式も同じです。強いて言えば、私の頭像指導は表現ではなく私のものつ造形解釈を追体験する鑑賞と位置づけられます。ですからこの制作に生徒自身の意図を必要としないのです。それを中学生の表現としたことこそが大失敗です。この時以来、指導の意味は、学び手の目線から問うことにしています。そして今、管理不行き届きの授業を楽しんでいます。

落ち葉アート、 アトリエ中沢の実践

神奈川県横浜市中沢小学校校長 丸 雄治

はじめに

今振り返ると、今回紹介する事例には共通している点が2点が挙げられる。1点目は、いずれも校長として需要に応じて造形活動に取り組んだという点。2点目は教室を越えた学校や地域に貢献する造形活動に発展したという点。今回は現在の勤務校での現在進行形の教育実践である。図工・美術科校長という立場でできる造形教育についての紹介という視点でも紹介したい。

落ち葉アート

この造形活動は地域子ども会からの依頼である。本校に勤務して2年目、校長としては4年目の平成24年度の事例である。子ども会が秋になると行う「イチヨウの落ち葉清掃」で集められたイチヨウの葉をそのまま廃棄するだけでなく、児童の作品として創造できないかという依頼があった。共同製作と個人製作の両方でできないかという要望も寄せられた。製作時間は2時間。参加者は小学生45人、中学生20人。6班に分かれる。小学校1年生から中学2年生までの縦割りの班編成である。

まず図工室に集合。作業机6台に分かれて座る。準備する用具は畳一畳大の白い布。霧吹きノズルがついたペットボトルを70本。これは手作り。絵の具はポスターカラーを使用する。黄色、赤色、水色、青色、橙色、黄緑色、緑色を水に溶いてペッ

トボトルに詰める。はじめに、私が全体の流れと、主なやり方を全参加者に説明する。

布の上に葉っぱを置く。霧吹きで色を吹きかける。はじめは黄色や橙色など明度が高い色から吹きつける。ある程度の画面への吹きつけが終わって、班ごとに吹きつけを中断。葉の位置を変えて、新しい葉を置いてみる。さらにその上に色を吹きつける。今回の色の選択は自由とする。さらに大小のローラーを使用することも自由選択とする。

廊下を隔てた理科室に移動する。理科部担当教諭による「紅葉」についての講義と実験を受ける。その間、子ども会役員のお母さん方と共に、図工室の共同作品を廊下の床に敷いた新聞の上に置いて乾燥させる。約40分後、児童は図工室に戻る。

個人製作に入る。一人一枚のB4判のシナベニヤを配布。イチヨウやその他の落ち葉を並べて接着剤で貼りつける。松ぼっくりやモール、フェルトを持参する児童もいた。接着が終了して完成とした児童は理科室に作品を持っていく。そこで

子ども会の役員の方にスプレースをかけてもらう。個人作品は理科室に置いて乾燥させる。

その後、図工室に戻り、後片



職員室に飾っている児童の絵

づけをする。全員が後片づけができた時点でまとめの話をする。

その後、参加賞のお菓子を渡す。もらった児童から理科室に行き、自分の個人作品を受け取る。活動終了である。全員、ニス塗装でピカピカのお気に入りの作品と参加賞を手にして満面の笑みで下校した。共同作品は校内を華やかに飾っている。

アトリエ中沢

アトリエ中沢と称して、校長室を開放して児童と共に造形活動を日常的に楽しんでいる。

教育課程内での授業においても、この時点で、3～6年生の図工の授業を依頼されて実践済みである。前任の小学校では副校長であったが、同様に授業を依頼されて実践している。

現在の勤務校では校長という立場であるので、校長室という定位置があることが強みである。

アトリエ中沢の最大の特徴は「児童の需要度が高い」「完全な口コミで広がっている」の2点である。

最初は、一人の児童の緊急避難から始まった。「休み時間の教室が怖い」という訴えがあり、「絵を描くのが好きなので校長室で過ごしたい」との意向を受けて、校長室で絵を教えたり、話をしたりした。それが2年前。友だちを連れてきて平成23年度は休み時間の在室者は最大8人。平成24年度4月。クラス替えて口コミは広がり、一気に40人が来室した。その後、コンスタントに毎日の休



生徒から注文を受けて描いた絵

み時間に40人前後が来室して絵を描いたり、私に描かせたり、注文したりしている。現在、注文数3000枚以上。ローカルルールをつくり楽しんでいる。「最初に来た人には3枚描いてもらう権利があり、2人目からは1枚ずつ」「卒業までには全部描いて渡す」「6年生は最優先」「後片づけはみんなで協力」「描かないものはあるが、描けないものはない」

この実践の副産物として、保護者と学校との関係がきわめて穏やかになったことが挙げられる。

中には私が描いた絵を100枚以上持っている児童も少なくない。ファイルケースを買ってもらった児童もいる。それほどではなくとも、保護者は「お世話になっていきます」と声をかけてくれる。始めた頃、「わが子が校長室に入った」事実だけで「何か悪いことをして叱られた」と思い、「鳥肌が立った」と言われた頃とは大違いである。



おわりに

造形活動は幅広い年代の人々に共通の感動体験ができる主体的な場を提供する。自分のイメージの具体化を楽しむ個人活動と美的体験交流を楽しむ共同作業のいずれも成長につながる大きな道である。アトリエ中沢の第一期生の児童は、現在堂々として学校生活を楽しんでいる。時々さりげなく校長室で並んで絵を描いてもらう。40人がひしめく室内でも落ち着いた物腰である。大きな成長を感じる瞬間である。「まねぶ」から図工が好きな児童が増え、年間250枚の賞状を戴いている。

中学校

教材研究

「15歳の私～夢と幻想～」 メゾチント (版画) で表す

滋賀県高島市立湖西中学校 むら た ひでとし
村田 秀俊

はじめに

私のまわりには、ものを描いたりつくったりする力も高まってきて、「美術が好きだ」「楽しい」という生徒がいれば、表現に自信を失い、意欲をもてなくなっている生徒もいる。部活動や生徒会・学級活動など、いろいろな場でリーダーとして活躍したり、将来への夢や希望をもち、がんばったりしている反面、将来への不安を抱きながらいろいろと悩んだり、友達関係のもつれから不安定になったりする生徒もいる。今回はそんないろいろな思いを出発点とした制作である。

3年生にとって、版画の学習は今回で3回目である。1年生でクロススタンプ（凸版）による模様版画、2年生でモノプリント（平版）による色面構成を経験しているが、例年先輩たちがやってきているメゾチントの作品を見て、黒と白、そして微妙な灰色の変化によって表現されているものの美しさに感動し、「これが版画?」「自分もこんな表現がしてみたい」という意欲をもつてくれる。メゾチントというこれまで経験したことのない版種による表現を、展示作品の鑑賞により楽しみにしている生徒が多い。

題材について

題材名「15歳の私～夢と幻想～」

版画は版によって表現する絵で、作品が複数できるといった特徴がある。完成する作品を予想し、見通しをもち、下絵を描き、版をつくる、そして、

刷るというさまざまな作業を経て、完成まで段階的に制作する。下絵から刷りまでのプロセスを体験させることで、計画性の大切さを学ばせることができる内容である。

「15歳の私～夢と幻想～」というテーマは、現在の自己の内面を改めて見つめ直し、自分の思いや夢を多様に自己表現することができ、自由に発想することで、今までのような形態を再現する束縛から解放され、造形の楽しさを感じさせることができる題材である。

黒から白への柔らかな階調の中に、無数の色を感じ取りながら、15歳の自分の内面にしっかり向き合い、思いや夢を形や色に表現する楽しさを味わわせたい。

ウェビングによる主題の明確化

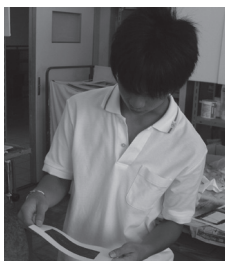
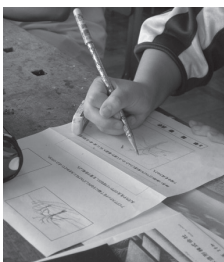
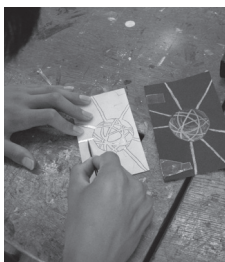
「15歳の私～夢と幻想～」というテーマをそれがどのような形で表現するか。

ウェビングとは、私たちの頭脳の中で行われていることを、目に見えるようにしてくれる思考ツールである。そのため記憶や整理・発想が格段にやりやすくなり、ひいては解決策を見つけ出したり、何かを実現していくということがとてもやりやすくなるツールとして活用されている。頭の中で起こっていることを外面化することで、思考空間を広げることができるのだ。

自分の思いを意識する、形にすること、それぞれが主題の明確化に大変有効であると考えている。

学習活動

- ① 夢と幻想というテーマでつくられた作品を鑑賞する。
- ② メゾチントの作品を鑑賞し、表現方法等について知る。
- ③ ウェビングを使って自分の主題を考える。
- ④ 主題をどのように表現するかアイデアスケッチをする。
- ⑤ アイデアスケッチをもとに、下絵を描く。
- ⑥ 下絵にもとづいて製版する。
- ⑦ 試し刷りをして、削りたりないところに製版を加える。
- ⑧ 本刷りをする。
- ⑨ 作品全体のイメージや、形や色等の効果をとらえながら、自分の価値意識をもって鑑賞し合う。



授業実践を振り返って

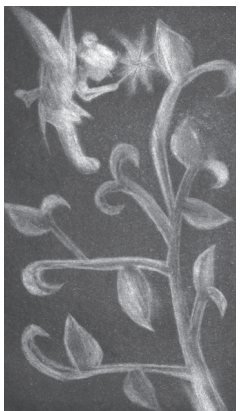
いざ制作を始めよう、テーマにもとづいてアイデアスケッチをしようといっても、なかなかイメージが浮かばず、時間を無駄に過ごしているようなことがあった生徒も、自分の思いを改めて見つめ、そこから主題を生み出していくという活動に、最初は戸惑いながらも、いろいろな自分の心のありようや夢、不安などを素直に書き表すことができていた。そして、主題をどのようなもので表すのか(線や形、材料など)ということも言葉で書き表すことによって、ぼんやりとしたイメージを、よりはっきりとしたものにできたように思う。15歳の自分を表現するために行った今回の活動は、自分の中にある漠然としたイメージや思いを明確なものとして描き出しながら造形活動に取り組む子どもの姿につながったのだと思う。

メゾチントは、黒い画面を少しずつ白くしていく活動である。描き加えていくというプラスの活動ではなく、従来の感覚からすると消しゴムで消していくというマイナスの活動に近い。そのため、構想カルトンの段階で、描こうとするもののもつイメージを自分なりに解釈し、微妙な濃淡を表現するために、黒画用紙に白鉛筆で描くという活動を取り入れた。柔らかい感じや力強い感じ、立体的に表現する方法、線で

はなく色の変化で形を表す方法など、白鉛筆をスクレーパーに見立てて表現していった。

先にも述べたが、メゾチントは柔らかな階調を表現することができる。これは、生徒たちのデリケートな感情とぴたりと合っているのではないのか。そんな版画だからこそ、微妙な濃淡の表現や製版(削り)にどんなのめり込んでいけるのではないかと思う。

印刷の段階では、インクの拭き取りに細心の注意を払い、プレス機を回す。「どれくらい拭き取ればいいんだろう」とまわりの子に聞いたり、相談したりしながら、インクの拭き取りを進めていた。自然とまわりとの関わりができていた場面であった。印刷が終わった後は、友達に見てもらいながら、「もつとこうしたいほうがいいかなあ」と話したり、「ああ、拭き取りミスか」とがっかりしたりしながらも、完成をめざしてがんばる。やっと本刷り。刷り上がった作品を見たその瞬間に表情が変わる。見事である。「わあ、すごい」「きれい」「自分にもできた」完成がはつきりわかる版画。版画・メゾチントで味わう喜びの一瞬である。苦勞してつくられたモノトーンの世界はどれも見応えがある。



担任っていいなあ

はっさむ いしがき
北海道札幌市立発寒東小学校 石垣 あけみ

学級担任を外れて数年。補欠で授業をすると、子どもと授業できることがこんなに楽しいのかと改めて感じる。わずかな時間で、どう導入するか、ポイントは何かなど、準備して指定の教室へいそいそと出かける。

先日、その機会が得られ、多目的室での2クラス合同図工を行った。私がT1、S先生がT2になって授業を進めた。

「今日は何をしたいの?」「おしゃれにしたい」「どんなふうに?」「リボンと星のついたかわいいの」

そんな思いを聞いていたら、もう20分。片付けの時刻を告げてから製作開始。

子どもたちは材料を広げて思い思

いの姿でつくり始めた。数人の友だちと輪になる子、一人で場所を広く使う子、柱にもたれながらつくる子…。

多目的室をゆっくり回っていると、ピアノの陰でつくっている子がいる。Dくん。どうやらここがお気に入りのよう。自分のペースを妨げるものから隔離されているためか、集中してつくっては「S先生、見て見て」とピアノの陰から出てくる。S先生は丁寧に話を聞き、共感しながら頷いていた。

S先生とDくんのやりとりを見て、子どもの発達段階に合わせた造形活動の大切さを改めて実感した。指導の押しつけではなく、発達を踏まえながら



その子その子のもっているものを引き出すということ。

DくんはS先生の「いいねえ!」の言葉がうれしかったようで、のりだらけになった自分の「帽子」をかぶり、意気揚々と職員室の先生方に見せに行った。後片付けの時もその「帽子」をかぶって。

担任っていいなあ。授業っていいなあ。

図工室 美術室

らせん工芸

しらさき とおる
福井県坂井市立春江中学校 白崎 徹

ある地域イベントで、ふと立ち寄った店で目に留まったものがありました。それは、らせん状のもので糸で吊るされていました。南国系のカラーリングで、そよ風に吹かれて揺れていたり回っていたり、見ていてとても心地よい爽やかな風情でした。

…という記憶を思い出し、これは授業で使えそうだと、同じようなものはないかと調べてみたのですが見つかりません。インターネットで調べればすぐわかって思っているいろいろ検索したのですがヒットしません。

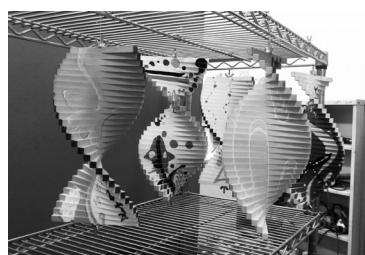
それは20cm長ほどの角棒が何十本も重ね上げられ、中央を1本の芯棒で貫かれているもので、重ね上げた角棒を1本1本前後にずらしていくとら

せん状の形体ができ上がります。これを糸で吊るすことで風に揺らめく作品ができ上がる、というもののなのですが、これが何という工芸品、あるいは土産物なのか調べてもわからないのです。もちろんどの国由来のものかもわかりません。意外とどこにでもありそうなのですが、これが何なのかを調べてみるとわからない。いよいよ不思議です。

こんなことなら売っていた店で聞いておけばよかったと悔やみました。仕方がないので地元の教材店に相談し、特注で生産してもらいました（実際に売っていたものはもっとらせんが長い。予算の都合で短くなってしまいました）。

この教材の便利な点は、絵柄を描く時や保管する時は平たい状態にできることです。仕上がった作品を吊ると、色とりどりの作品が風に揺らめいてとてもよい感じになりました。勝手に「らせん工芸」と名付けています。

ところで、この工芸品の詳細をご存じの方はいらっしゃいませんか?



今月の

見つけたよ!



「どこかにキリンが隠れている」

宮城県仙台市立折立小学校 2学年

作者：

いろいろな色のお花紙を並べていたら、何だかキリンに見えてきた。それを、どこにいるかわからないように隠したいと思いました。きれいに隠れたので、うれしかった。

光に当てると、お花紙の薄い色がとてもきれいだった。

指導者：

最初に、「お花紙で遊ぼう」と、子どもたちにお花紙の色や感触などを十分に楽しませた。次に、和紙と組み合わせ、お花紙を並べたり、重ねたり、いろいろ試しながら、自分の一番いい感じだなというものを見つけさせた。

地域のアート

「束荷の草木を素敵に見せる花器づくり」

山口県周防大島町立城山小学校
菅野 雅人
(前任校 光市立束荷小学校)



地元の窯元、生け花の先生を講師として招き、花器づくり、花の生け方を教えてもらいました。



小学校近くにある伊藤公資料館で展示をしました。



「キラキラストー」(色画用紙／32×43cm)

愛知県碧南市立日進小学校 3 学年



「私の大好きな学校」(絵の具、カラーペン／36×52cm)

千葉県君津市立坂田小学校 5 学年



「集まれ昆虫たち」

(段ボール、木枝／絵の具／30×30cm)

熊本県人吉市立人吉東小学校 3 学年



「益子にて」(絵の具／31×44cm)

栃木県真岡市立大内中学校 3 学年